

子どもたちの生活時間の構造

—「2.5次行動」に注目した時間の使い方の分析—

木村 治生 (Benesse教育研究開発センター教育調査課長)

【要旨】

本章では、選択できるが拘束性の高い行動（習い事、学習塾、部活動、アルバイト）を子どもに特徴的な行動として「2.5次行動」と定義し、そこに注目した分析を行った。2.5次行動は、必要度の高い1次行動や2次行動よりも、自由裁量の余地が大きい3次行動との関連が大きく、2.5次行動の時間が増える場合は3次行動の時間が削られる傾向がある。このことは子どもたちの「忙しい」という意識とも関係しており、2.5次行動の時間が長くなると、子どもたちは忙しさを強く認識することが明らかになった。

1. はじめに

時代とともに子どもたちが育つ環境は変化する。子どもたちが、時間をどのような活動にあてるかについても、変わってきたと考えるのが妥当だろう。たとえば、藤沢市教育文化センターが市内の中学3年生を対象に実施している調査（2006）では、1965年から学習時間が減少していることが示されている。こうした傾向については、近年、学力低下に対する不安が高まるなかで、子どもたちの「学習離れ現象」として問題視されている。さらに、テレビやテレビゲームの普及によって外遊びの時間が減少していることや、睡眠時間の減少をはじめとする生活時間の乱れを心配する意見も多い（たとえば、中村，2004など）。パソコンや携帯電話のような新しい電子機器を使用する時間が増えていることに対して、そうした乱れを引き起こす要因としての不安に加えて、子どもたちの人間関係の希薄化をもたらしているのではないかと不安

の強いことが指摘されている（北田・大多和，2007）。

このように、大人たちはつねに、子どもの時間の使い方（その時間に行われる行動）について注意を払ってきた。特定の時間（たとえば学習時間や外遊びの時間など）が減少すると、子どもの育ちに重要な機会が失われてしまうのではないかという危惧を抱いてきたし、別の時間（たとえば、テレビやテレビゲームなどに費やす時間など）が増加すると、悪影響の可能性を恐れて否定的な態度をとることが多かったといえるだろう。

それでは、子どもたちの時間の使い方について十分な検討がなされてきたかということ、必ずしもそうではない。総務省が1976年から5年ごとに行っている「社会生活基本調査」は我が国の生活時間調査の代表的なものだが、中心となる調査対象は大人である。このため、大人世代（20歳代以上）と子ども世代（10歳代）の大まかな違いは明らかにできても、子ども期に特徴的な活動については十分に明ら

かにされていない。これは、NHK放送文化研究所が行っている「国民生活時間調査」でも同様である。社会的な関心が高いにもかかわらず、子どもの時間の使い方に関する調査や分析は不足しているのが実状である。

本報告書はその不足を補うものであるが、本章では、子どもたちの生活時間の構造の全体像を明らかにすることを目的とする。とくに、子どもによる差が大きいと考えられる、生きていくうえで必要な活動や義務的な活動以外の時間の使い方がどのようになっているのかを中心に分析していきたい。

2. 行動の分類

はじめに、行動の分類をしよう。

「社会生活基本調査」(総務省, 2008)では、20種類の行動を大きく3つの活動にまとめている。

① 1次活動 (人間が生きていくうえで生理的に必要な行動)……睡眠、身の回りの用事、食事

② 2次活動 (各個人が家庭や社会の一員として行う義務的な行動)……通勤・通学、仕事、学業、家事、介護・看護、育児、買い物

③ 3次活動 (各個人の自由裁量時間に行う活動)……移動 (通勤・通学を除く)、ラジ

オ・テレビ・新聞・雑誌、休養・くつろぎ、学習・研究 (2次活動の「学業」以外)、趣味・娯楽、スポーツ、ボランティア活動・社会参加活動、交際・付き合い、受診・療養、その他

この分類はおもに大人を想定したものであり、子どもにはそぐわない行動があったり、反対に子どもには必要と思われる行動が抜けていたりする。また、自律的な判断で行動することが多い大人には義務的な行動と自由裁量で行う行動の区別がつきやすいが、子どもの場合はそうではない。自由時間のなかに半ば義務的な行動を保護者や教員(学校)が設定することがある。さらに、本来的には選択しないことも可能だが、さまざまな事情から拒絶することが難しかったり、一度選択してしまえば拘束性が高かったりする行動もある。そうした義務と自由の間の中間的な行動が多いことが、大人と比較したときの子どもの特徴であろう。そのようなことを考慮したうえで、本調査研究では子どもの行動分類表を作成した(P6参照)。

さらに選択可能だが拘束性の高い活動を抜き出して「2.5次活動」と名づけ、そこに注目した分析を行うことで、子どもの行動の特徴を明らかにしたい。本章の分析では、子どもの行動分類を次のように設定した。

- | |
|---|
| <p>① 1次行動……睡眠、身のまわりのこと、食事</p> <p>② 2次行動……通学、学校、放課後に学校ですぐず (部活動以外)</p> <p>③ 2.5次行動……部活動 (行動分類表では「2次行動」に分類)、学習塾、習い事・スポーツクラブ、アルバイト (以上、行動分類表では「3次行動」に分類)</p> <p>④ 3次行動……移動 (通学以外)、屋外での遊び・スポーツ、室内での遊び、テレビゲーム、家での勉強 (学校の宿題)、家での勉強 (学校の宿題以外)、習い事の練習、テレビ・DVD、本・新聞、マンガ・雑誌、音楽、携帯電話、パソコン、家族と話す・すぐず、友だちと話す・すぐず、家の手伝い、買い物、からだを休める、ペットとすぐず、その他</p> |
|---|

注1) なお、本章における①1次行動は行動分類表の「1次行動」に対応するが、②2次行動は行動分類表の「2次行動」から部活動を除いたものであり、④3次行動は行動分類表の「3次行動」から学習塾、習い事・スポーツクラブ、アルバイトを除いたものを指す。

注2) 習い事・スポーツクラブは、以下では「習い事」として略記した。

3. 分析の手順

以下では、次のような手順で分析を進める。

①2.5次行動の特徴の分析

他の活動と比べて、2.5次行動にはどのような特徴があるか。

②2.5次行動と1次行動、2次行動、3次行動の関係の分析

2.5次行動は、1次行動や2次行動との関連は小さいと考えられるが、3次行動とは逆相関の関係にあると推察される。拘束性の高い2.5次行動が多くなると、自由裁量の余地が大きい3次行動の時間が少なくなると考えられるが、そのようになっているか。

③2.5次行動内の行動間の関係分析

それぞれの行動は排他的な関係にあり、特定の行動を行うと、それ以外の行動はしない傾向にあるのではないか。

子どもが自由に選択することができる時間は限られる。したがって、2.5次行動を選択

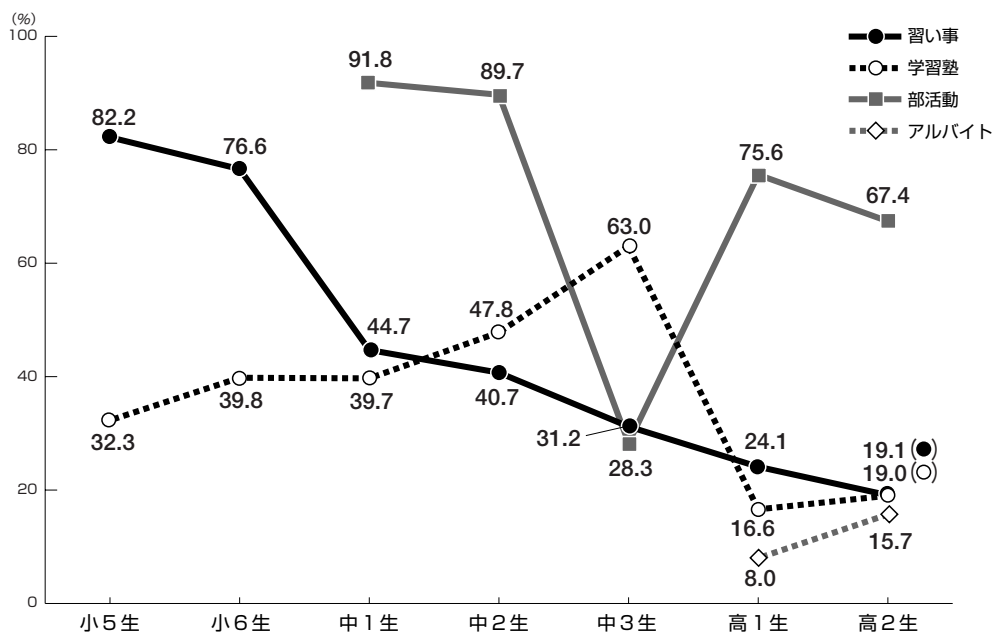
すると、他の活動に割く時間が十分に取れなくなると考えられる。子どもたちの活動を検討するうえで、2.5次行動の位置づけを明らかにしておくことは重要である。上記の分析を通して、子どもが自由に選択することができる時間の構造を明らかにしたい。なお、データは24時間の生活を15分刻みでたずねた「24時間調査」の結果を中心に用い、補足で「アンケート調査」の回答によって得られたデータを用いることにする。

4. 2.5次行動の特徴

ここでは、2.5次行動が、それ以外の行動と比べてどのように異なるのかを明らかにする。

最初に、それぞれの行動をしている割合から確認しよう。図1-1は、「アンケート調査」でたずねた結果である。週あたりの日数や1回あたりの時間を問わず、それぞれの行

図1-1 2.5次行動の実施状況（学年別）



注1) 部活動は中・高校生のみ、アルバイトは高校生のみにたずねた。

注2) 「習い事」は習い事や学校外のクラブに「行っている」、「学習塾」は学習塾に「行っている」、「部活動」は部活動に「入っている」、「アルバイト」は「定期的にアルバイトをしている」の比率。

動を行っているかどうかを表している。小5・6生の8割が「習い事」に、中3生の6割が「学習塾」に、中1・2生の9割と高1・2生の7割程度が「部活動」に「行っている／入っている」という結果であり、ほとんどの子どもが何らかの2.5次行動を行っていると思われる。ただし、小学校段階では「習い事」が中心であるが、中学入学による「部活動」開始とともに「習い事」の割合は減少する。さらに、高校入試を目前に控えた中3生は「部活動」が一気に減少するのに代わって「学習塾」が増え、高校入学とともに再び「部活動」と「学習塾」が入れ替わる。このように、図1-1からは、おもに行う2.5次行動の種類が学年によって異なるようすもわかる。

続けて、図1-2は、「24時間調査」でたずねた結果から、行動分類ごとに活動時間の分布を示したものである。全体に、1次行動や2次行動は分散が小さいのに対して、3次行動は分散が大きい。これらの行動は「1時間未満」がほとんどなく、毎日の生活のなかに必ず出現している。それに対して、2.5次行動は、いずれの学校段階でも「1時間未満」の割合がもっとも高い。ほとんどの子どもが何らかの2.5次行動を行っていることから考えると、毎日行う活動ではないため、日によってその活動が現れないことがあるのだと考えられる。2.5次行動は、やる日とやらない日ははっきりしている活動だということである。

5. 2.5次行動と他の活動との関係

それでは、2.5次行動と1次行動、2次行動、3次行動の関係はどのようになっているのだろうか。

1次行動や2次行動は子どもにとっての必要性が高いため、2.5次行動の量に大きくは左右されないと考えられる。これに対して、自由裁量の余地が大きい3次行動は、2.5次行動と逆相関の関係にあるのではないかと推察される。

図1-3には、その傾向が表れている。学

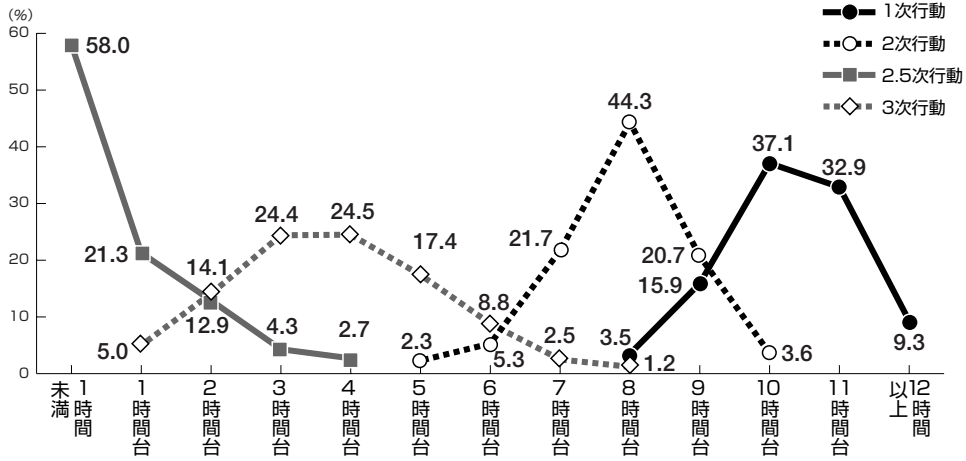
年が上がるとともに1次行動は減少、2次行動は増加する。この2つの行動には、2.5次行動と連動するようすはみられない。これに対して、2.5次行動が増える中1生では3次行動が減少する、3次行動が増える中3生では2.5次行動が減少するといった具合に、2.5次行動と3次行動は連動して増減していることがわかる。

2.5次行動の時間ごとに他の行動の時間（平均時間）をみたのが、図1-4である。ここからは、学校段階を問わず次のような傾向が表れている。第一に、2.5次行動が増えると1次行動も2次行動も減少する。ただし、その減少幅は3次行動ほど大きいものではない。いずれの学校段階でも、2.5次行動が「1時間未満」の子どもと「4時間以上」の子どもの1次行動および2次行動の時間の差は100分以内である。これに対して、第二に、3次行動は2.5次行動が増えると大きく減少する。2.5次行動が「1時間未満」の子どもと「4時間以上」の子どもの3次行動の時間の差は、小学生で約150分、中学生で約210分、高校生で約190分である。2.5次行動は、1次行動や2次行動よりも3次行動と連動して増減していることがここでも明らかである。ちなみに、2.5次行動の時間（合計）との相関係数は、1次行動で「-0.263」、2次行動で「-0.137」、3次行動で「-0.523」であり、いずれも0.01%水準の危険率で有意な関連を示しているが、3次行動は強めの逆相関である。

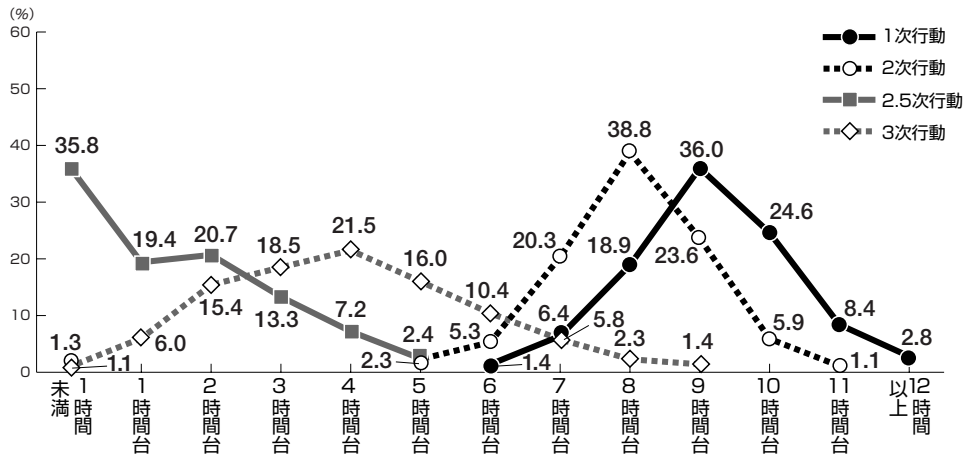
このことから、比較的拘束性の高い2.5次行動が、必要度の高い1次行動や2次行動よりも、自由裁量の余地が大きい3次行動を圧迫しているということが出来る。習い事や学習塾、部活動、アルバイトといった活動は、睡眠時間や学校にいる時間などに一定の影響を与えてはいるが、それよりも自由度が高い3次行動の減少をもたらす。習い事や学習塾に通うことで遊びの時間や家での勉強の時間が減少したり、部活動の時間が長くなるとメディアの時間が短くなったりするなど、2.5次行動の増加によって子どもたちの自由な時

図 1-2 1日の行動分類ごとの活動時間（学校段階別）

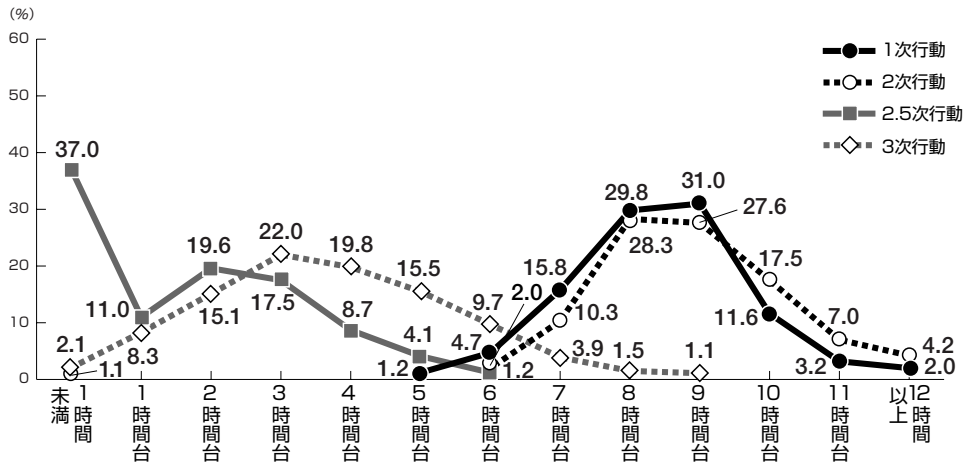
①小学生



②中学生



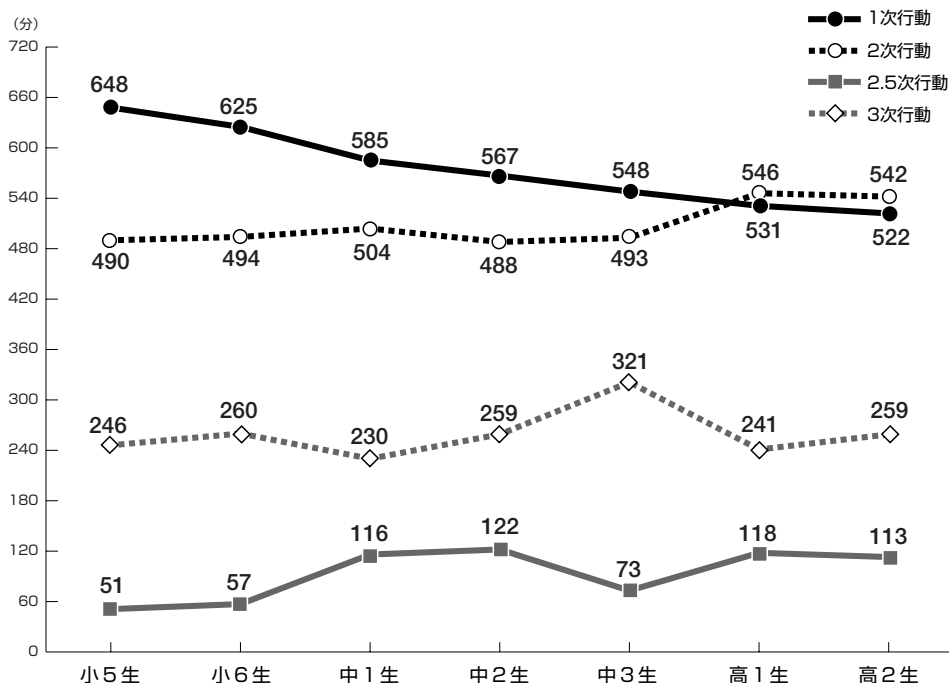
③高校生



注 1) 行動の分類については、P15を参照。

注 2) 図をわかりやすく示すために、1%未満の数値については図から省略した。

図1-3 1日の行動分類ごとの平均活動時間(学年別)



間が失われているという見方ができる。もしくは、外遊びやスポーツの機会が不足するために習い事や部活動が増えたり、家での勉強が十分でないために学習塾の時間が増えたりするなど、2.5次行動が3次行動を代替している面があるのかもしれない。

補足として、2.5次行動と意識の関係についてみておこう。図1-5は、2.5次行動の時間別に、子どもたちが「忙しい」と感じるかどうか(「とても感じる」+「わりと感じる」)を表している。ここからは、学校段階を問わず2.5次行動の時間が長い子どもほど「忙しい」と感じる割合が高いことが読み取れる。図表は省略するが、1次行動や2次行動の時間は長くても「忙しい」という意識とあまり関連をもっておらず、3次行動の時間にいたっては短い子どものほうが「忙しい」という思いを抱いている。良し悪しは別にして、子どもたちの「忙しい」という思いには、習い事や学習塾、部活動、アルバイトといった2.5次行

動の時間の長さが強く影響しているようだ。

6. 2.5次行動内の行動間の分析

次に、2.5次行動のそれぞれの活動、すなわち習い事、学習塾、部活動、アルバイトの相互の関連を検討しよう。ここでは、アンケート調査でたずねた行動の有無の結果を用いて、学校段階別に分析を行う。

まず、小学生に対しては部活動とアルバイトについてはたずねていないので、習い事と学習塾の関連があるかをみよう。図表は省略するが、結論から述べると、習い事をしている子どもの通塾率は36.2%、習い事をしていない子どもの通塾率は35.2%で、両者にはほとんど関連がなかった。習い事をしているから学習塾に行っていないというわけではない。

中学生に対してはアルバイトについてはたずねていないので、習い事、学習塾、部活動の関連をみる。ここでも図表は省略するが、

図 1-4 1日の行動分類ごとの平均活動時間（2.5次行動時間別・学校段階別）

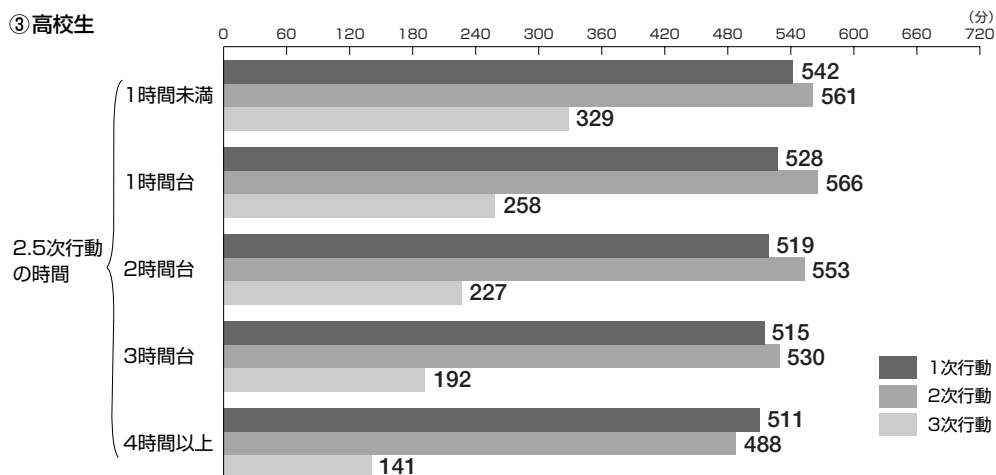
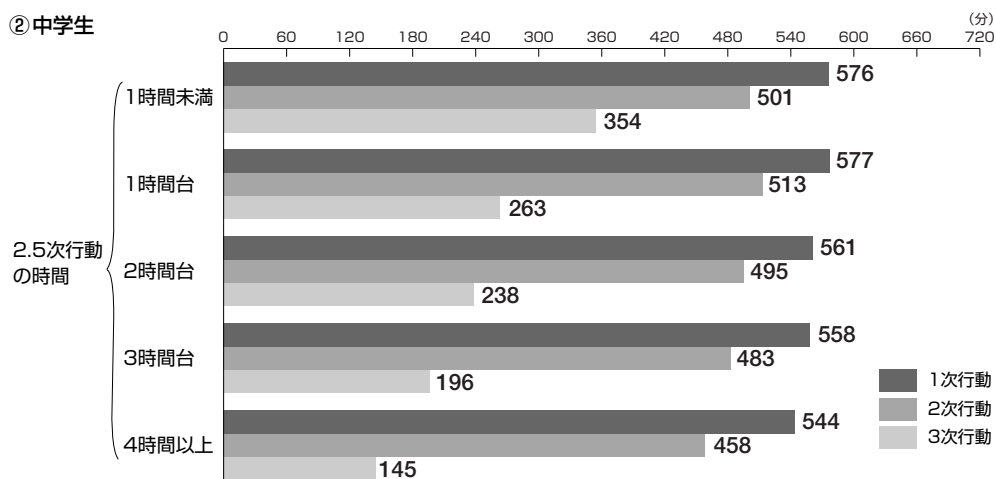
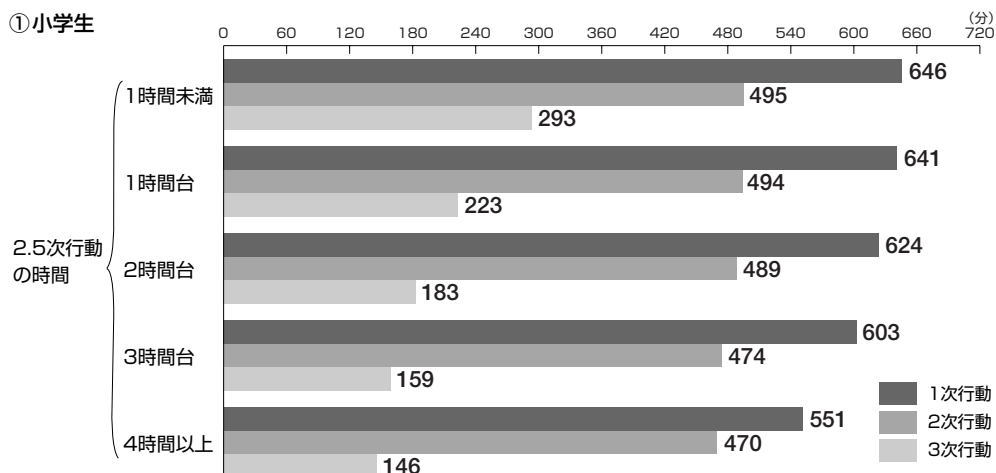
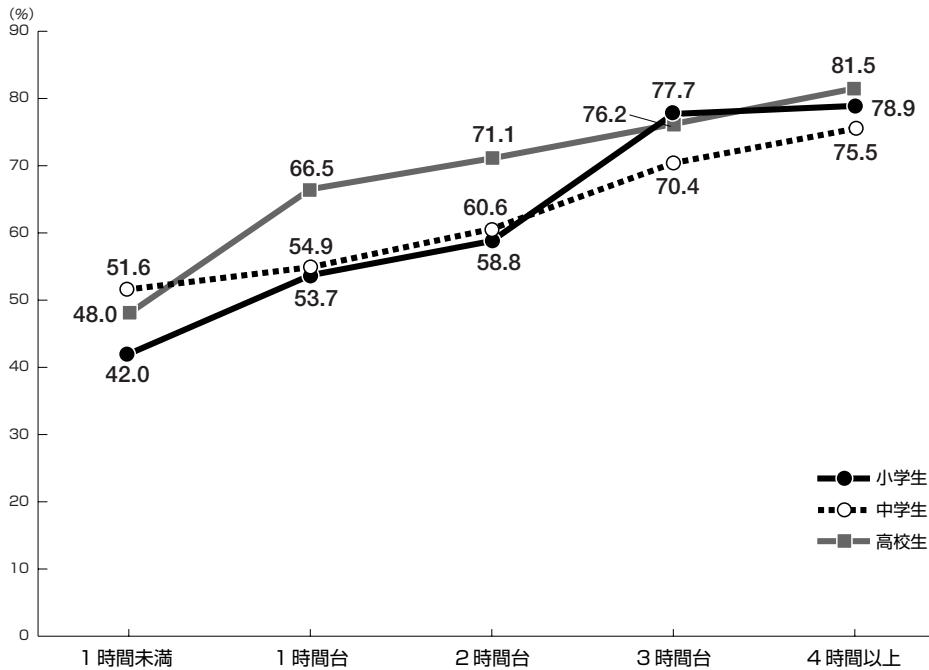


図1-5 「忙しい」という意識（2.5次行動時間別・学校段階別）



注) 「とても感じる」+「わりと感じる」の%。

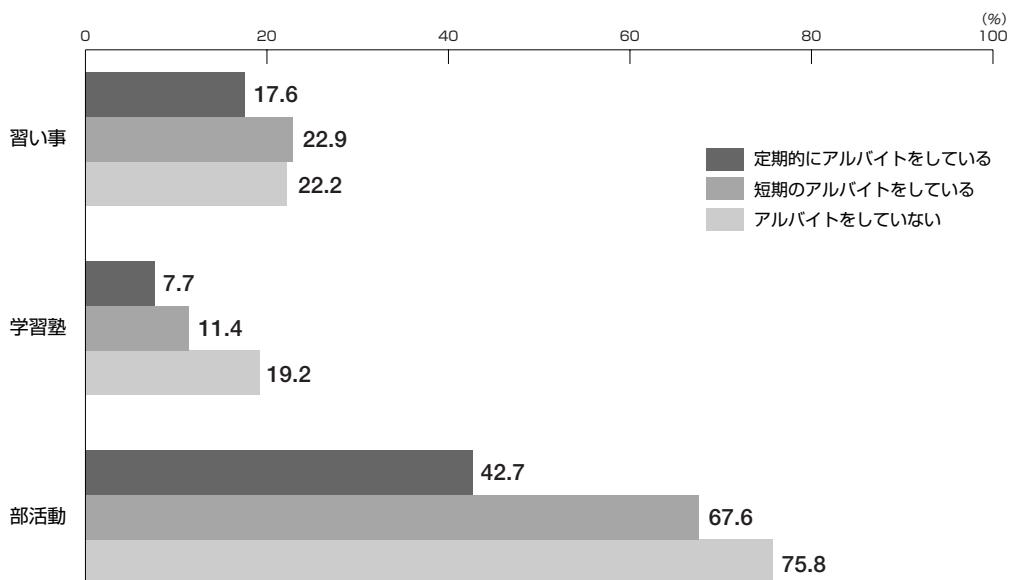
習い事と学習塾および部活動は弱い正の相関があり、わずかではあるが習い事をしている子どものほうがしていない子どもより学習塾や部活動を行っている割合が高いという結果がみられた。また、学習塾と部活動は負の相関になったが、これは中3生で部活動の引退後に学習塾へ通うようになることの表れである。中3生を除くと、何か1つの行動を選択することが他の行動を犠牲にするというわけではないようだ（かけもちのようすは、第3部第2章を参照）。

高校生も、全体の傾向は同様である。ただし、アルバイトをしている子どもだけ、傾向が異なる。習い事、学習塾、部活動の3つの活動は、それぞれが排他的な関係にあるわけではない。しかし、アルバイトだけは、学習

塾と部活動で負の相関が表れる。図1-6からわかるように、「定期的にアルバイトをしている」子どもは、学習塾への通塾率や部活動への参加率が低い。

当初は、自由時間は限られているため、それぞれの行動は排他的な関係にあり、特定の行動を行うと、それ以外の行動はしない傾向にあるのではないかと予測した。しかし、高校生のアルバイトを例外として、必ずしもそうではなかった。一部には弱い正の相関がみられるものもあって、習い事や学習塾、部活動をかけもちで行うケースも多いようすが示された。こうしたことは、2.5次行動の時間が長い子どもほど「忙しい」と感じる割合が高いことと関係していると考えられる。

図 1-6 習い事、学習塾、部活動の実施状況（高校生、アルバイト実施別）



注)「習い事」は習い事や学校外のクラブに「行っている」、「学習塾」は学習塾に「行っている」、「部活動」は部活動に「入っている」の比率。

7. 2.5次行動を行っているのは誰か

最後に、誰が2.5次行動を行っているのかという点に触れておきたい。

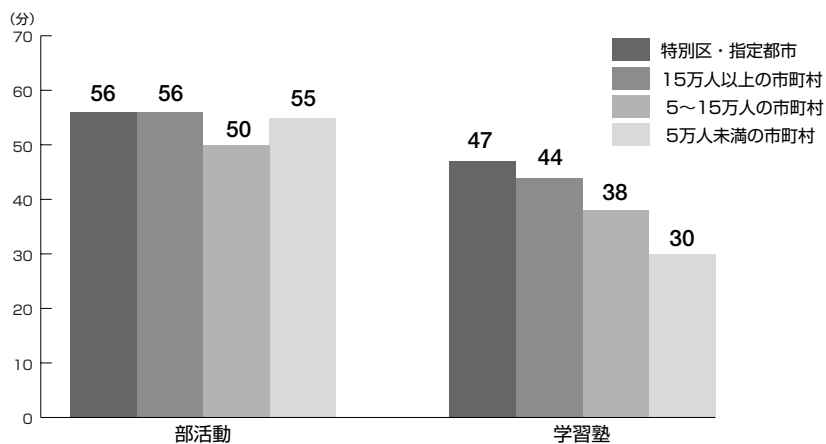
詳述する紙幅がないため図表は省略するが、まずは概略を述べると、学校段階を問わずに次のような傾向がある。第一に、1次行動と2次行動の時間の長さは、属性による違いが小さい。すなわち、居住する地域や家庭的な背景（父母が大卒かどうか）、学校での成績、性別などによる時間の長短の違いはほとんどみられない。どのような子どもにとっても、必要、かつ実行できるということであろう。第二に、2.5次行動は、地域で見ると都市部に、家庭的な背景で見ると父母の大卒層に、学校での成績で見ると上位層に多いという特徴がある。第三に、3次行動はそれとはほぼ反対の傾向にある。地域的な違いについては一定の傾向がみられなかったが、父母の大卒層よ

りも非大卒層に、成績上位層よりも下位層に多い結果となった。2.5次行動も3次行動も、特定の子どもが選択的に行っている。

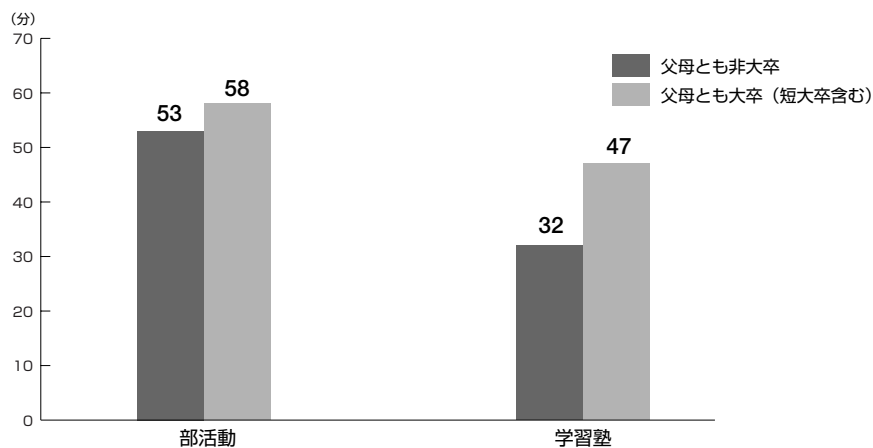
ところで、都市部、父母大卒層、成績上位層において時間が長いという2.5次行動の特徴は、すべての活動に同様に見られるわけではない。習い事と学習塾にそのような傾向が強く表れているが、部活動は属性による違いがほとんどない。また、高校生のアルバイトには、父母非大卒層、成績下位層で時間が長いという、異なる傾向がある。図1-7では、中学生の部活動と学習塾の平均時間を属性別に示した。ここからも、学習塾は属性による違いが明らかなのに対して、部活動は属性ごとの差がほとんどない。今回の分析では、2.5次行動のように同じ区分にまとめた活動のなかにも、地域差や階層差が小さくて平等性が高い活動と、そうではない活動が含まれている。

図1-7 部活動、学習塾の平均時間（1日あたり、中学生・属性別）

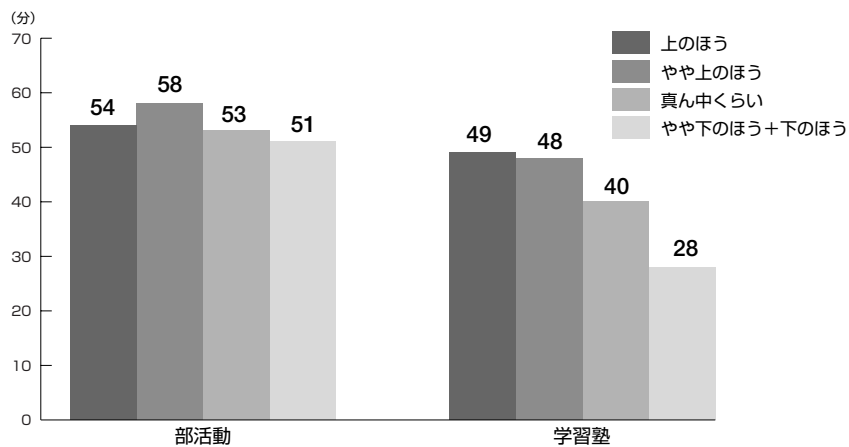
①地域別



②親の学歴別



③学校の成績別（自己評価）



注) 父母の学歴については、どちらか一方が非大卒の組み合わせを省略した。

8. おわりに

本章では、子どもたちの生活時間の構造の全体像を明らかにしてきた。とくに、子どもに特徴的な行動として、選択できるが拘束性の高い「2.5次行動」を抽出し、そこに注目した検討を行った。種類が異なる活動が、本章で定義したそれぞれの行動分類の中に含まれているために、もう少し詳しい分析が必要だと考えられるが、おおむね次のような傾向が明らかになった。

1つは、必要度が高い1次行動や2次行動は分散が小さく、多くの子どもが決まった時間を費やしているということだ。これに対して、3次行動は分散が大きく、子どもによる差が大きい。また、2.5次行動は、やる日とやらない日の時間の違いが大きい活動だということが示唆された。

2つめに、2.5次行動は、必要度の高い1次行動や2次行動よりも、自由裁量の余地が大きい3次行動を圧迫していることが明らかになった。2.5次行動の時間が長くなると3次行動が短くなるといった負の相関がみられる。

3つめに、2.5次行動のなかで特定の行動の

時間が長い子どもは、別の行動の時間が短くなるのではないかと予測したが、必ずしもそのような結果にはならなかった。複数の行動をかけもちしている子どもも多く、2.5次行動の時間が長い子どもは生活全般が窮屈になり、「忙しい」と感じる割合も高まることが示された。生活のゆとりや自律的な行動の機会の喪失が懸念される結果であり、習い事や学習塾、部活動、アルバイトは「ほどほどに」というのがよいようだ。

冒頭にも述べたように、子どもの時間の使い方についての研究は、社会的な関心が高いにもかかわらず十分とはいえない。また、個々の活動の時間はそれぞれのテーマに応じて検討がなされているが、今回のように全体の構造を明らかにするような分析は、ほとんどなされていないというのが実態である。1日の時間はすべての者に平等に24時間だ。このため、ある時間が長くなると、別の時間が短くなるといった構造にある。特定の時間の増減のみに着目するだけでなく、子どもたちの時間の使い方が全体でどうなっているのかといった視点での研究が、今後も必要だろう。

<参考文献>

- 藤沢市教育文化センター, 2006, 『第9回「学習意識調査」報告書—藤沢市立中学校3年生の学習意識』.
- 北田暁大・大多和直樹, 2007, 『子どもとニューメディア』日本図書センター.
- 中村和彦, 2004, 『子どものからだが危ない!』日本標準.
- 総務省, 2008, 『平成18年社会生活基本調査報告』(第1巻～第8巻).